

イチゴの道、イチから

輪之内町の西松さんが脱サラ就農

大学卒業後、県内の金融機関に勤めていた西松さん。転機は3年ほど前。町が主導して町内の農地集約を進めており、祖父の代から稲作をしていた西松さんの家の田も対象になった。代々続く稲作や農地を守るため、自分が何をすべきか悩んだ末、就農を決断した。

専業農家として稲作より収益力のある作物も必要と考える中、「嫌いな人はいない」として選んだのがイチゴだった。バック詰めなど手作業で行う工程が多く、大規模農業者が参入しにくいことも後押し。栽培の仕組みを事業として確立できれば次代への継承もしやすいため、農業法人の設立に踏み切った。

それまで農業の経験は「週末に父の稲刈りを手伝う程度」。昨年3月に金融機関を退職し、4月に全国農業協同組合連合会県本部

輪之内町楡俣の西松勝典さん(57)が農業法人「令和農園」を立ち上げ、今年からイチゴの栽培に取り組んでいる。祖父の代から受け継ぐ農地を守ろうと昨年、30年以上勤めた会社を辞め、一からイチゴ栽培を学んでの挑戦。西松さんは「お世話になった人たちにおいしいイチゴを届けたい」と意気込む。(柴田洋希)

農業法人 受け継いだ農地を活用

(JA全農岐阜)が運営するいちご新規就農者研修所へ入所した。息子と同世代の若者と机を並べ、14カ月かけて栽培の技術や出荷の段取りを学んだ。

現在は、2週間後に完成予定のビニールハウスで育てるため、苗の育成に力を注ぐ。今月末に本格的な栽培をスタートさせ、11月に収穫する。収穫量は半年間で約7・5トの見込みだ。

広さ約15㍓の農園で育てるのは、甘さと酸味のバランスが持ち味の県ブランド「美濃娘」。町を代表するイチゴ農家を目指すという西松さんは「まずは基本に忠実に栽培し、5年後くらいに自分なりのイチゴを作り上げたい」と見据える。

初のイチゴ栽培に向け、育成中の苗を前に意気込む西松勝典さん。輪之内町楡俣

